

春雪の富士

春雪の富士と向き合ひ深呼吸彼方に在りし故郷は今

文枝

犀星の詩うたつべなひし故郷はひたすら遠く花霞みして

れん

ふるさとは遠き彼方の空のした山川草木春霞みの中

弁慶

母あらず父もまたなきげんげ畑ふるさとまとめて花いちもんめ

かわせみ

魚野川見え初めにつつ故郷は寂しくあれど一日の浄土

花

気がつけば処々方々で鳴き交わす声はうぐいす初音なるかな

蘇生

たんぼぼの茎吹く子等の弾む類ぶぶぶと鳴らしぶぶぶと笑ふ

雛菊

突然に海彼の国のデモの渦戦争知らぬ子等に幸あれ

真奈

かの国の抗日知らぬ世代にもそのDNAは埋め込まれたか

蘇生

抗日の歴史薄れし日本の心貧しく物の豊かさ

文枝

東海の便りを寄する術もなし孤島へ帰る君と別れなば

海斗

うつらかな日和の空に帯の雲君の島への地震兆せり

蘇生

落花落葉こころ向けつつ生きをれば天災人災間断のなし

れん

散るからに花のさかりをいとしみて逢ひみむ春のまた永遠に美し

真奈

花過ぎのわれの外なき静寂の地にかすかなる薬ふる音の

蘇生

八重桜ほつてり咲いて背が重い過去形なのに音がするんだ

海月

カトレアが造花の如く整いて香りふんだん進行形に

蘇生

とこしへの国へ旅たつはらからの足もとてらせ真白き一輪

れん

「ダイヤ守れ」ノルマは遂に脱線へー 六人のダイヤ絶ちたり

真奈

買出しの列車でじじが死んだのさ鴻巣駅で荷車押したさ

海月

若き日を輝き生きて忽と死す花の命の重み重なり

文枝

老いるとも朝な夕なに甲斐もちて生くる仁ありかく歩まばや

蘇生

八千歩あるき歩いて逢ひにゆくあけばの杉と吾のみの空

かわせみ

逢いに行くさつきみなづき耀けば放たれて空を行くこいのぼり

花

家族なる鯉の幟を糸に連れ大風高く風に動ぜず

蘇生

タコなれば八方美人に手を引かれ夢醒めやらぬ春の余の風

鮫鱈

余の風のおこぼれ貰ひ混合酒腰が抜けたさ葉桜の青

海月

駆け落ちになおも欠けたるバイアグラ欠けゆく月に挂(か)かる雲かも

鮫鱈

くり返しくり返し書く淳一の秘めごと語りマンネリに落つ

蘇生

さつきには縁ぞ色にまさりけり晴れて山行く君のすがしさ

鮫鱈

待宵の香すがしき夏木立縄文女神通り過ぎたか

真奈

初夏の光を浴びて彼我もなくまどろみをれば麦笛の夢

海斗

五月きて昼の干潟が広がりてやがて寄せくる潮騒の音

蘇生

潮騒に重なり聞こゆ母のうた海には母がつねにいますゆゑ

かわせみ

魚とり鳶ゆくさきに雛ありやひねもす垂れる浮きの軽さよ

鮫鱈

降る雨の季にあらずや肌寒く名残りの藤の褪せてぞ垂るる

れん

散策に出でんとしては装いに迷う名残りの風の冷たさ

蘇生

ひとり寝の旅に冴えたり窓の月李白の詩集枕辺の夏

鮫鱈

蓮の実を五月の西施摘みとるや夢に小舟のたゆたひて行く

真奈

ほのぼのと笑たまひますかばせの慕はしきかも合歡の花咲く

千種

合歡の抱く巫山の夢の置き露に雲は映りて風に流れん

鮫鱈

春盛る北の大地の森林に老倒木の無残なるかな

蘇生

苔むさば朝霧木洩る日のもとのシダやキノコの森ともならむ

鮫鱈

台風になぎ倒されし老木もやがては朽ちて土になるかな

蘇生

おほ風もこ風も夢の風の国 花に息吹く木陰のいびき

鮫鱈

覚めぎはの耳をくすぐるパンの笛 蜥蜴の尻尾きらり光って

千種

底抜けのミッドサマーナイト 森の中 悪戯パック送信ミスだよ

真奈

パン喰らひ パックを剥ぐにミスありや 白粉のらぬサトウルヌスの日

鮫鱈

ザンフィルのパンフルーツがながれゆく地には 平和を壺中の夢や

海月

フルーツとフルーツ 描く 静物画 リンゴの腹にわれは金蠅

鮫鱈

静物画観るのが好きで 握り飯 上野の森にころりころころ

文枝

めし食えば 鐘は上野の寛永寺 パンダ坐りの腹は満ちたり

鮫鱈

早暁の空に満ちたる月 白く空き腹にくる 近き鐘の音

蘇生

鐘を撞き 吾に帰りし山の上 微かに聴こゆ千の風の音

文枝

風吹かば 蝶のみならずゴキブリのわれも 飛び行く 星光る空

鮫鱈

極彩の仮面をつけて 道化師は光と闇を 軽やかに飛ぶ

真奈

わが顔も一皮むけば 髑髏なり 生死の境に一輪の花

鮫鱈

夜行列車の窓に貼りつき どこまでも 憑きて 離れぬ われのペルソナ

かわせみ

本当の自分に出会ふ 旅に在り 夜行列車の長きトンネル

文枝

霊犀の角に穴あり 相通す 千里の果てに 君は飛ぶ鳥

鮫鱈

暗き夜の果ての狭間をつきぬけて 光に翔ばむ 透明となり

れん

透き通る肌 浮かべる天のへそ 井蛙(せいあ)は 仰ぐ九段の鳥居

鮫鱈

腹ふくる井蛙は 健忘症なるか 一点の恥辱なき 天は何処

真奈

復興は 生き残りらの 努力なり いくさ命じし咎(とが)は 原爆

鮫鱈

片意地の男の 美学咎なりて 国か己か 何やら可笑し

蘇生

孤立の国 いいえ 私は 孤独には なれぬ 性なり 可笑しみのひと

れん

英霊が 望むところか 火種抱き 再戦誓ふ 敵はアメリカ

鮫鱈

生きてゐた英霊現るまぼろしのごとき歲月償ふは誰ぞ

かわせみ

償ふは国と決まつてゐるのだが金を積んでも帰りこぬ日々

鮫鱈

皇軍の兵士を生きた六十年正直者が馬鹿見る国でした

真奈

往き往きて皇軍「興味ありますね」ライオンへアー坊主にしたい

海月

小さいにも泉に映る花影に純で―ずな女郎蜘蛛の巣

鮫鱈

分らん償つのはね国じゃない戦後を生きた我々なんだ

海月

理屈では癒すすべなき償いに海ゆく人に望郷の月

鮫鱈

何人の発句賦し物さみだれて天下の望み今ぞ尽きける

丹仙

はつきりといはぬが花に心ありあじさい蕾むさみだれの庭

鮫鱈

さみだれの細く降りつき濡れてゐる山紫陽花のちややく色づき

れん

憲法「NONのフランス・トリロール灰色となる四日月の色

真奈

NONにこそ誇りあるべしフランスの憲法守る鼻の高さよ

鮫鱈

日本国憲法しかと守るべし戦争差別してはいけない

文枝

いくさ場に行けぬ年寄り杖つきて若きに国のほまれ説きをり

鮫鱈

「君死に給ふことなかれ」は反戦でなく家憂ふる歌と言ふ「つくる会」

真奈

雨紫陽花 国に誉れなどあるものか 鮫鱈自ら戦場に立て

海月

税という年貢を納め国という傘もとわれは立ちつくすのみ

蘇生

筆よりも重きは持たずいくさ場は人の心と決めてをり余は

鮫鱈

倒壊のポプラ並木の再現に思い想いや人の心は

蘇生

色も種も揃はぬ森の鳥の声 天は望まず有為の斉唱

鮫鱈

友よ友我ら桃李の森に集うはやくおいでよ一緒に歌おう

雛菊

歌詠みは下手こそよけれいざ我も心震わすことを歌おう

海斗

日々の心をかきおこる事々を記すすべとし詠みて留めん

蘇生

風ふかばよもはらからの言の葉のさざめきわたる木霊ありなむ

鮫鱈

六月の花みな白きガレ場にも驟雨に小さき眼ひらきて

真奈

売子木の花なだりに白く散りさびて足踏み変えつ登りてゆかな

花

水掬ふごとく両手の白薔薇香をかぐままに散り滅びけり

千種

きざはしのつばらつばらに幾霜のたれか亡びし人ぞ偲ばる

蘇生

どよめきの青春(はる)の祭りの列に在り少女は死して永遠に生きたる

真奈

今もなほ寄せ来る漣(なみ)のどよめきて思ふむかしの跡をぞ洗ふ

鮫鱈

交易のむかしを印す和賀江島ころたの石は波の間に見ゆ

蘇生

蒼天に幻の船消えゆきぬ沖の小島の波の悲しも

真奈

悲しみの涙の河となりゆけばゆきつく先の海のひろさよ

鮫鱈

桃李和歌連作百首歌集

第六五〇一首より六六〇〇首迄

平成一七年四月一六日より平成一七年六月五日